

## フレーベル以後の幼稚園 (1)



津 守 真

幼稚園は現在世界中に普及している教育機関であり、社会の人々から受けいられている制度である。しかし幼稚園の発展したのには比較的近年のことであり、その創始も古いことではない。周知のように、幼稚園運動は、ドイツのフレーベルに始まる。フレーベルは又、彼の幼児教育の思想をそれ以前の教育改革者達、即ちルソーやペスタロッチに負う所が大きいのであるが、それらの教育の先駆者達と同様に、フレーベルは当時の形式主義に墮した教育に対して一つの反叛を企てたのである。フレーベルの幼児教育の主張は、要約するならば、神性の所有者としての児童を一個の人格として認めること、教育は児童の創造性を啓発すべきものであること、教育の方法としては自発的活動を原理とすべきことである。まだ他にも彼はいろいろの理論を展開しているけれども、一応此の様に云うことが出来よう。そして彼はこれらの主張を、彼の考案した幼稚園(キングダーガルテン)を通して具体的に展開しようと試みたのである。フレーベル自身は、その生涯の中に彼の幼稚園が普及するのを見ずに終つてしまつたのであるが、その後、彼の後継者達が世界中にフレーベルの幼稚園運動を普及させるために尽力し、その結果、幼稚園は幼児教育機関として社会から受けいられるようになったのである。

フレーベルの幼稚園創始までの事情は他の研究書にも詳しいので此処に詳述しない。フレーベル以後、幼稚園がいかにして社会から受けいられるようになり、幼稚園の教育自体がこの間にどのような変化を遂げてきたか、そして現在の形の幼稚園になつて来たか、

を私は眺めてみたいと思う。

世界中でフレイベルの幼稚園が最も普及したのは、アメリカと日本であると云う。始めフレイベル主義が全面的に受け入れられて、そしてそれが批判されて保育法が変革を遂げた点も似ている。相異点もいろいろある。根柢的な相異点は暫く措くとしても、例えば、日本においては私立幼稚園が全幼稚園の約六〇パーセントを占めているのに対して、アメリカでは私立幼稚園の占める比率は約一四パーセントで、八六パーセントまでは公立幼稚園である点、アメリカでは殆どすべての公立幼稚園は二部制保育をしている点、幼稚園対象児は五才児のみであって、それ以下をナースリースクールとしている点、日本の場合は幼稚園と保育所との二元制度のとられている点、アメリカでは幼稚園教諭の資格は小学校低学年までの資格を含む方向にあることなど。

日本の幼稚園はその発展の途上で屢々アメリカの影響を受けている。日本の幼稚園の歴史については、倉橋惣三氏の書物に詳しい。私はここでアメリカにおける幼稚園の発展の過程を中心として、フレイベル以後の幼稚園の変遷を見たいと思う。

米国における幼稚園の歴史は、一八五五年に一ドイツ婦人によってウォータータウン (Water town, Wis.) に最初の幼稚園の創られてから現在に至るまで、本年度で丁度百年になる。その間の発展は大略次の段階に分つことが出来る。

## I 幼稚園創設期

- (1) 一八五五〜一八七〇 幼稚園が紹介され、導入された時期
- (2) 一八七〇〜一八八五 幼稚園が教育機関として一般から受け入れられ、普及した時期

## II 公立学校系統への統合と保育法変革期

- (1) 一八八五〜一九一〇 幼稚園が公立学校系統に統合され始めた時期。幼稚園内部における危機の胚胎と保育法の論争
- (2) 一九一〇〜一九二五 進歩主義教育による幼稚園保育法の變革と、近代的幼稚園の基礎確立の時期

III 一九二五——近代的幼稚園の樹立。科学的方法による児童研究が幼稚園教育の推進力となった時期

フレイベル主義は、その後の幼稚園の発展の途上で、即ち上のII及びIIIの時期において、徹底的に批判された。徹底的過ぎる程に變革が行われた。これはフレイベルの主張の具体的展開の際の方法論に内在した誤謬からくる必然的な結果でもあったのであるが、他面、進歩主義者達が余りにも大きな勝利を占め、此の後幼稚園教育における心理主義の時代を現出することになった。此の傾向は技術的進歩を促したのであるが、心理主義だけでは教育の問題は解決されないのは当然である。幼稚園としての伝統と、新しく出発した児童心理学との交錯によって形成せられて来た近代的幼児教育の成立と現在動きつつある傾向まで辿って見たいと思う。

百年の歩みは短いようで長い。上に掲げた順序に従って述べてゆかなければならないので、時に迂遠屈屈な箇所のあることも免れ

ない。

## 第一章 米国における幼稚園の創始

幼稚園の紹介 一八五四年、英国の首都ロンドンにおいて、教育施設及び教材の国際展示会が行われた。ときの米国教育長官ヘンリー・バーナード (Henry Barnard) 博士は、米国代表としてロンドンを訪れた。バーナード博士は、幼稚園、キンダーガルテンについては、それまで名前すらきいていなかったのであるが、その展示会の中で、フレイベルの幼稚園の展示が強く彼の注意を惹いた。その展示会で彼が見た幼稚園のことについて、バーナード博士は彼自身の主幹するアメリカ教育雑誌第二巻(一八五六年)に次のように報告している。短い報告であるが、これがアメリカで幼稚園の紹介された最初のものであらうと思われる。

「一八五四年のロンドン教育展示会に出品されたものの中で、最も興味深く又最も教えられたものの一つは、ハンブルグのホフマン氏によって提示された、フリードリッヒ・フレイベル考案にかかる、廉価にして簡単な教材の見本であった。それは、既にヨーロッパの主要都市で紹介されているフレイベル氏の乳児園 (Infant Garden, キンダーガルテンの最初の英訳) の教育体系において用いられるものである。」(註一)

これは、フレイベルがマリユンタールで失意の中に没してから二年後のことであり、マレンホルツ・フォン・ビュロー夫人やその他の人々が、フレイベルの教育理念を普及させるために熱心な運動

を開始し、ヨーロッパ各地で講演をしたり、幼稚園を設立したりしていた頃である。

米国で発表された幼稚園に関する最初のもつた論説は、一八五九年の、クリスチャン・ユザミナー誌上に現われたものである。その中からここに一部分を引用してみよう。

「ドイツにおいて、政治の自由が、何度も何度も侵されている時に、他方、知的生活は、あらゆる形の科学や芸術の分野において発展し続けた。ドイツ人の知性には、我々は極めて多くのものを負っている。彼らによって聖書の解釈や神学の上にも多くの新しい光が投げかけられた。これら種々の知的生活の中で、教育も亦政府と国民の注目を惹いた。プロシアとザクソニーの公立学校制度は、その徹底度において、その広汎な適用範囲において、又その能率において他のいかなる国をも凌駕するであらう。此の国における高い知性と深い思想とを考える時、教育を人生の最初の出発点から開始し、子供の最初の知識に対する欲望からその最初の発達に至るまで、漸次に段階を追って指導しようとする新しい教育体系が現われたとて、何の不思議もなからう。幼稚園教育によって、高等学校、更に大学への道を固めなければならない。……パリには幼児教育普及会と称する協会が設立された。……有能な一アメリカ婦人が此の協会の会員となつて働いている。……我々は、此の国(アメリカ)の若い婦人達が、その制度をアメリカに紹介するために、その知識を得べく海を渡つて此の婦人と協力することを切望するものである。……我

々はアメリカの母親達が此の運動に對して熱意ある関心を払うことを希う。そして、フレーベルの愛唱の句、『いざや、我らの子らと共に生きんかな』に忠実であらんことを望むものである。(註二)

#### 最初の幼稚園

実際に行われた最初の幼稚園は、一ドイツ婦人ミセス・カール・シュルツ (Mrs Carl Schurz) によつて一八五五年にウイスコンシン州のウォータータウンに開設されたものである。カール・シュルツ氏は當時のプロシアにおける政治的思想的压迫から逃れて、アメリカに政治的自由を求めて来た政治学者である。シュルツ夫人はドイツにいる頃、フレーベル自身の経営していた保母養成所において、幼稚園並びに保育法を学んだ経験があつた。そして彼らが北米の僻遠の地に移住した時に、自分達の子供の教育のために幼稚園を開設した。広大な土地にヨーロッパ各地から移住して来た人々が集つて出来ているのがアメリカであり、一八五〇年はアメリカに最初の大量の移民が行われた時期である。これらの第一世移民達はそれ々の生国の言葉を使用していたのであつて、最初の幼稚園も亦ドイツ語によつて行われていた。

シュルツ夫人は、フレーベル主義の教育が幼児教育として最善のものであることを信じており、フレーベル主義の方法に從つて教育を施した。此の最初の幼稚園については、これ以上詳しく知ることが出来ない。これに引きつづいて、アメリカの各地に、ドイツ人の手になる、ドイツ語のフレーベル主義幼稚園が設立されている。しかし乍ら、これらは何れも公衆の注目を惹くまでには至らなかつ

た。シュルツ夫人の幼稚園も、当時においては知られたものではなかつた。後年、盛んな幼稚園運動が展開するまでに、もう少し社会的機運が熟さねばならなかつた。それから、公衆の関心と興味を喚起する程の、力強い指導力を必要とした。幼稚園運動が開花するには、エリザベス・ビーボデイ女史の興味が幼稚園に向けられ、彼女の旺盛な精力が幼稚園運動に献げられるのを待たなければならなかつた。

初期の幼稚園運動は、その極めて多くのものを、偉大な指導者、エリザベス・ビーボデイ女史に負うている。ビーボデイ女史自身には時に幼児教育の体系というものは見出すことは出来ない。ただフレーベルの教育思想と幼稚園の考えに極めて強く賛同し、それを普及させるために大きな力となり、初期の幼稚園運動の推進力となつたことにその意義がある。初期の幼稚園にして何かの形で彼女の息吹がかかつていないものはない、と云つても過言ではあるまい。

エリザベス・ビーボデイと幼稚園運動については、私は本誌の昨年八月号に記したので、これは初期の幼稚園史上に開いた大輪の花のようなものであるが、こゝに重複する部分は避けよう。(註三)

ビーボデイ女史が英語による最初の幼稚園を、自分の家に開いたのは、一八六〇年である。時は恰も、アメリカの南北戦争の終つた時期であり、アメリカにおける近代工業がこれから勃興しようとしていた時である。新しい機運が各方面に動き、近代社会のアメリカがその活動を開始しようとしている時期に當る。ビーボデイ自身の

中にも新しい運動に献身する準備が整い、社会も奴隷解放運動に伴う人道主義の進展の機運、それに対する新機軸を受け入れようとする態勢が整ってきた。

これより先、ビーボディは偶然にウイスコンシンにシュルツ婦人を訪れ、その時に極めて明敏な六才位の子供と知り合つて、そのよく教育されていることに驚いたと云う。ビーボディ女史に尋ねられて、母親(カール・シュルツ夫人)は云つた。「あゝ、この子はドイツのクレーベル主義の幼稚園で教育を受けているのです。」(註四)先に掲げた、ヘンリー・バーナードの教育展示会における報告のあらわれたのも、それからクリスチャン・ユグザミナー誌上の幼稚園に関する論説のあらわれたのも、丁度この頃であつて、ビーボディはこれらにも目を通していたことは確かである。ビーボディ女史が幼稚園開設に先立つて幼稚園に関して知っていたことは、私の知る限りでは、これだけのものであらうと思う。これだけのヒントから何故彼女がかくも熱心な幼稚園運動にのり出したかを考えると、それは、どうしても、ビーボディの広い文化的教養と、彼女がニグロ解放、インディアン解放などに示したヒューマニズムとが理解されなければならず、又他方、幼稚園教育そのものの中に潜む、文化的香氣とヒューマニズムとが理解されなければならないのである。

正確に云うと、ビーボディ女史が自分の家に幼稚園を開いた年に先立つて、一八五九年に妹のタアリーが、一年前に夫のホラス・マーンを失つて、コンコードの自分の家に幼稚園らしきものを開いてい

た。それをビーボディ女史は、「殆ど幼稚園らしきもの」と云つてゐる。一八六一年に、ビーボディの幼稚園はピクニー・ストリート(Pikney street)に移され、ピクニー・ストリート・キンダーガルテンとして後に知られている。二人の妹達、即ち、ホラス・マン夫人と、ナタニユル・ホーソン夫人がその先生であつた。此の頃までに、ビーボディ女史は、フレールベルの主著「人の教育」を読んでいる。

註一 Barrard, H.: Report of London Exhibition, American Journal of Education, 1856, 2, 449—451

註二 Cheney, E. D. & Parsons, Q. T. A.: Kindergarten of Germany. The Christian Examiner, 1859, 313—339

註三 本誌五十三巻八号所載のビーボディに関する論説には、誌面の都合上、参考文献を載せられなかつたので、こゝに掲載しつゝおく。

Tharp, L. H.: The Peabody Sisters of Salem. Little Brown & Co. Boston, 1950, pp. 372.

Ferner, M. S. & Fishbourn, F.: Elizabeth Peabody and the Kindergarten. Journal of National Education Association, 1941, 275—276.

註四 Vande Walker, N. C.: The Kindergarten in American Education, 1908, Mc Millan, N. Y. pp. 274